JICAの大学連携プログラムを活用した短期海外研修の実践デザイン
～セネガルでの実践事例から～

岸　磨貴子[*1]　　久保田　賢一[*2]　　吉田　千穂[*3]

要　旨

本研究の目的は，JICAの大学連携プログラムにおいて，短期ボランティアとして派遣される学生および学生を受け入れる青年海外協力隊員の双方にとって有益な実践とするため短期海外研修をデザインするための要件を提案することである．双方にとって有益な実践とは，学生たちが現地での社会貢献活動に十全的に参加し経験できることであり，受け入れ隊員にとっては日々の実践を拡張し発展させることである．具体的には，2014年２月に関西大学がセネガルで実施したプロジェクト型の短期海外研修を事例として，大学側および受け入れ隊員の双方にとって有益な連携の可能性について考察する．そのために，次の２点を明らかにする．ひとつはプログラムに参加した学生の学びである．大学が教育プログラムとして実施する上で本プログラムが有益であるかどうかについて，学生の学びに焦点をあてて評価を行う．ふたつめは，受け入れ隊員にとっての利点である．途上国での活動経験が少なく，専門知識や技術が十分にない学生を受け入れることは，受け入れ隊員にとって大きな負担となるが，大学との連携は受け入れ隊員にとって新しい活動への展開となる可能性がある．インタビューおよび参与観察をもとにこの２点を明らかにした上で，双方にとって有益な実践をデザインするための要件を学習環境のデザインとして提案する．

キーワード：大学の地域連携，JICA，途上国，短期海外研修，短期ボランティア，
学習環境デザイン，国際協力

Designing a Short-term Overseas Service Learning Program with a Collaboration between Universities and the Japan International Cooperation Agency:
A Case Study in Senegal

[*1] 明治大学国際日本学部
[*2] 関西大学総合情報学部
[*3] NPO法人学習創造フォーラム

Makiko Kishi, Kenichi Kubota, Chiho Yoshida

Abstract

In this study, the authors discuss the method to design a short-term overseas service learning program in collaboration with the Japanese Overseas Cooperation Volunteers（JOCV）. The authors' research is based on a case study conducted by Kansai University in Senegal in February 2014. Two undergraduate students from the university were dispatched to Senegal to work with a member of the JOCV, who is engaged in a medical clinic as an audiovisual expert. To design a reciprocal practice for both students and the JOCV, the authors clarified the following aspects: first, knowledge gained by the students during the collaborative practice. Second, benefits gained by the JOCV from this practice. The authors analyzed data collected through interviews and participatory observation based on action research and suggested the method to design a reciprocal practice for both the students and the JOCV in a collaborative practice.

Keywords: collaboration between universities and external organizations, JICA, developing countries, short-term overseas service learning, volunteer, designing a learning environment, international corporation

1．研究の背景

グローバル化の進展に伴い，大学は国際社会の中で活躍できる人材を育成することが要請されている．国際社会で活躍できる人材には，語学力に加え，異文化間でのコラボレーションを実現することができる能力を備えることが求められる（文部科学省2011）．多くの大学はこれまでも海外の協定大学へ学生を派遣する海外留学などを国際的な教育実践として展開してきた．しかし，学生が海外に留学しても，学生が現地で得られる異文化の人とのコミュニケーションの機会は限られていることが報告されている（工藤 2009）．このような課題から，異文化間でのコラボレーションを実現するための教育実践のひとつとして，途上国における社会問題を現地の人と協同的に解決することを目指した活動（以下，社会貢献活動）が着目されている（Lui & Lee 2011）．

学生が途上国における社会問題の解決に取り組むためには，現地（異文化）の人との協働が欠かせない．このような活動の特徴から，途上国での社会貢献活動を大学教育のひとつとして位置づけて取り組む大学もある（たとえば，明治大学2015，早稲田大学2015，お茶の水女子大学2015）．大学教育の一環として途上国での社会貢献活動への関心は高まるが，学生が途上国で活動することに対する危機管理が課題となっている．途上国では，政治的，宗教的，文化的な衝突や衛生面から不慮の事故や病気などの危険性が比較的高いため，学生の安全を保障しな

がら現地で活動をさせるためには，学生の行動をある程度制限するなどの危機管理が必要となるため学生を途上国に派遣することは困難であると捉えられている．

このような中，JICA は，大学生および大学院生を短期間，途上国に派遣されている青年海外協力隊員のもとへ派遣するという短期ボランティア制度を実施するようになった．短期ボランティア制度には，A タイプ（JICA ボランティア経験者向け），B タイプ（JICA ボランティア未経験者向け）があり，B タイプの要請の中には，学生でも応募が可能な要請がある．東京大学，日本体育大学，帯広畜産大学などがこの制度を利用して学生を短期ボランティアとして派遣している．

このプログラムに短期ボランティアとして参加した学生（以下，学生短期ボランティア）は，JICA が長年の青年海外協力隊員派遣の経験を通して蓄積した様々なリソース，たとえば，現地の情報，危機管理情報，語学に関する情報などを活用することができる．また，途上国の現場では，現地に精通している青年海外協力隊員が学生短期ボランティアを受け入れ，彼らは学生短期ボランティアにとって途上国での異文化間協働のロールモデルとなる．学生短期ボランティアは，青年海外協力隊員の活動を手伝いながら，徐々に自分たちのやりたいことを見つけ，実践することができる．まさに，途上国での社会貢献活動に参加し、学ぶことができるのである．一方，JICA は，参加した学生が将来国際協力をめざすことを期待している．また，学生を受け入れる青年海外協力隊員（以下，受け入れ隊員）にとっても，メリットがある．たとえば，イベントや大規模な調査などは人手が必要なとき，派遣される学生が未経験者であっても実施の補助を得ることができる．

以上のことから，JICA の大学連携プログラムは，双方にとって有益であることが期待されるが，受け入れ隊員にかかる多大なる負担が課題となっている現状もある．特に英語を公用語としない地域では，受け入れ隊員が通訳しなければならない。また，通常業務に加え，仕事面だけでなく生活面でも学生短期ボランティアを受け入れるための宿の手配，移動の手配，健康管理や危機管理など，生活面での管理も任される．

本研究では，実際の事例をもとに学生短期ボランティアおよび受け入れ隊員の双方にとって有益な実践とするためには，実践をどのようにデザインすればよいかを考察する．

2．研究の目的

本研究の目的は，JICA の大学連携プログラムにおいて，学生短期ボランティアおよび受け入れ隊員の双方にとって有益な実践とするため短期海外研修をデザインするための要件を提案することである．双方にとって有益な実践とは，すなわち，学生短期ボランティアが現地での社会貢献活動に十全的に参加し経験できることであり，受け入れ隊員にとっては日々の実践を拡張し発展させることである．

本研究では，次の 2 点について明らかにする．第一に，大学の教育プログラムとして本実践

が有益であったかどうかを判断するためには，学生の学びを評価する必要があるため学生が本実践を通して何を経験し，そこから何を学んだかを明らかにする．また，本実践での学びが，これまで学生らが取り組んできた他の形態での社会貢献活動と何が違うかについても，明らかにする．第二に，受け入れ隊員にとって，これまで一人では取り組めなかった規模の大きなイベントにおいて新しく関わることになった人達との関わりや自分の役割の変化を通して何を経験したのか，またそれを今後どのようにつなげていけるかについての見通しを明らかにする．このように新しく挑戦した地域連携のイベントの実践が，その後の業務にどのような変化をもたらす可能性があるかについても考察する．

最後に，本実践研究において見られた課題について考察し，今後の研究課題として提示する．

3．実践の概要

本研究は，2014年2月10日から3月16日の35日間，関西大学総合情報学部（以下：関西大学）がセネガルの青年海外協力隊員と連携した実践事例を対象とする．関西大学では，2005年からシリア，フィリピン，カンボジア，バングラデシュなど途上国で学生主体型の社会貢献活動が実施されている（久保田・岸 2012）．活動に参加する学生の多くは，情報学を専門とし，情報教育の分野での社会貢献活動を実施していた．たとえば，フィリピンでは，現地の小学校教員の授業改善を目的として情報機器の教育活用について研修をしたり（山本ら 2012），シリアでは日本と現地の子どもをインターネットでつないで異文化理解を目的とした教育実践を実施したり（岸ら 2010）している．このように情報学を専門とする学生らが，自ら専門知識や技術を活用して社会貢献活動をする体験型の学習を行っている．

このような体験型学習の一環として，関西大学はJICAの大学連携プロジェクトに参加し，関西大学卒業後，セネガルへ派遣された青年海外協力隊員のもとへ2名の学生を派遣した．

学生を受け入れた青年海外協力隊員（以下受け入れ隊員）は，タンバクンダ州医務局に派遣されている視聴覚教育隊員である．タンバクンダ州では，妊産婦死亡率及び，乳幼児死亡率が高く，住民は質・量ともに十分な基礎保健サービスを受けられていない．更に住民の予防知識不足が，健康問題を悪化させている．このような背景のもと，医務局に配属されている受け入れ隊員は妊産婦健診の普及・定着を目指し，健診の大切さと家族計画の重要性を伝えるための保健・衛生啓発活動を行っている．

受け入れ隊員が，学生短期ボランティアを申請した理由は，その啓発活動のためのイベントを同医務局が管轄する保健ポストと協働で開催するためである．現地との交渉をしながら一人でイベントの企画や啓発教材を作成することは難しい．そのため，受け入れ隊員を補佐し，教材作成の支援とイベントの企画，イベント当日の運営支援のため，学生短期ボランティアを要請した．学生短期ボランティアは，受け入れ隊員と協働し，保健・衛生啓発のための教材作成を行うこと，そして，保健・衛生啓発イベントの企画・運営支援を行うことが求められた．

3.1 短期ボランティア受け入れのプロセス

セネガルへの学生短期ボランティア派遣は，次のプロセスで行われた．

①関西大学は，JICAと協議の上，関西大学の卒業生が青年海外協力隊員として活動している任地に在校生を派遣し，活動の支援を行うことについて合意した．

②関西大学は，JICAから青年海外協力隊員として派遣中の卒業生のリストを受け取り，引き受けてもらえそうな青年海外協力隊員へ連絡を取り内諾を得た．

③青年海外協力隊員は現地事務所に報告し，学生短期ボランティアの派遣を要請した．

④JICAは一般公募してウェブページに広報し，関西大学の在校生がこれに応募した．

⑤JICAは学生からの応募用紙をもとに第一次審査を行った．第二次審査は，東京で面接を行った．

⑥学生は審査に合格した後，JICAでの5日間の事前研修を受けて，現地へ派遣された．

3.2 事前学習から現地到着までの流れ

学生短期ボランティア派遣が決定した後の事前学習から現地での活動までの流れは，表1に示す通りである．以下，それぞれの活動について詳述する．

事前学習

2名の学生短期ボランティアは，派遣前にJICAが提供する研修とは別に次の2つの事前学習に自主的に取り組んだ．ひとつめは，週に一度の勉強会である．毎回，セネガルの文化，フランス語，母子保健・衛生に関する課題，教材開発の方法などテーマを決めて，担当を決めて順番にプレゼンテーションをし，テーマについてディスカッションをした．ふたつめは，受け入れ隊員との週に1度のインターネットを通したテレビ会議である．テレビ会議では，現地での

表1　全体のスケジュール

月　　日	活動内容
2013年9月	ボランティア参加の確定
2013年10月31日～	受け入れ隊員との事前学習（インターネットを使ったミーティング）
2013年11月25日～11月29日	JICAによる日本での事前研修
2014年2月10日	セネガルへ渡航
2014年2月12日	現地JICA事務所にて健康管理・安全対策などの研修
2014年2月13日	ダカールからタンバクンダへ移動
2014年2月14日	イベント実施のための準備
2014年3月9日	イベント実施
2014年3月11日	イベント終了の振り返り
2014年3月12日	タンバクンダからダカールへ移動
2014年3月13日	ダカールにて活動報告
2014年3月16日	帰国

具体的な活動について話し合ったり，受け入れ隊員から派遣先であるタンバクンダ州の現状や勉強会で理解できなかったことなど情報収集したりした．また1ヶ月の現地滞在期間中に学生短期ボランティアが担当する教材を完成できるように，西アフリカ圏（フランス語）で使われている手洗いの紙芝居の絵の意味を読み取ったり，フランス語の表現や専門用語を確認したりするなど事前準備を行った．

JICAによる事前研修

事前研修は、各国に派遣される150名ほどの短期ボランティアを対象として，東京で5日間実施された．短期ボランティアは，「JICAボランティア事業の理念」「健康管理」，「安全対策」，「参加型開発手法」，「任国事情」，「意見交換会」などの講座を受講した．

JICAによる現地研修

現地到着後，学生短期ボランティアはJICA事務所での1日の研修に参加し，JICAセネガル事務所が行っている国際協力事業についての説明や，派遣中のボランティアの特徴，特に日本での事前研修と同様に健康管理，安全対策について受講した．東京での研修における健康管理・安全対策の内容は，一般的な病気や感染症や事故についてであったが，セネガル事務所では，セネガルで発病率が高いマラリアの予防法や予防薬の接種方法，緊急事態になった時の対応など現地に特化した内容であった．

3.3 現地での活動：母子保健・衛生啓発イベントに向けた準備

学生短期ボランティアの要請の目的である母子保健・衛生啓発イベントの実施は3月9日であったため，それまでの2月13日から3月8日の約1か月，学生短期ボランティアは受け入れ隊員と連携し，保健・衛生啓発教材の作成および，母子保健・衛生啓発イベントの企画・運営を行った．具体的に，学生短期ボランティアは，下記の5つの活動に取り組んだ．

（1）医療施設見学（州医務局・州病院・保健センター・保健ポスト）

学生短期ボランティアは，まず現状を理解するため，イベントが実施されるタンバクンダ市にあるサレギレール地域保健ポストの各医療施設を訪問した．セネガルの医療施設は，州立病院，保健センター，保健ポストという順に，施設で実施できる医療処置の範囲が異なる．保健ポストは，地域に根差した診療を行い，住民がアクセスしやすい医療施設である．これらの現状を理解するため施設を訪問し，施設で働く人たちのお話を聞いた．

また，イベントにおける啓発活動においてどのような情報をどのように伝えるかを検討するため，各施設に掲示されている教材を参考にしたり，作成する教材の内容について保健センターの助産師の意見をうかがったりした．

(2) 青年団との打ち合わせ

イベントの実施にあたっては，サレギレール地域の青年団と連携した．青年団は，20〜40歳位の地域の青年が参加する団体で，10名程の男性が主要メンバーとなってサレギレール地域住民の生活向上を目指したボランティア活動に取り組んでいる．イベントの企画・準備において，企画の内容やスケジュール，広報活動，役割分担について吟味し，活発に意見を出し合った．

(3) 啓発劇練習

セネガルなど西アフリカにおいて，口承文化が根強く残っているため，イベントでは啓発劇を実施することとなった．青年団のメンバー２名が考えたシナリオを基に，現地語であるウォロフ語とプラール語（サレギレール地域で多く使われている現地語）で，妊産婦検診の重要性を訴える内容の劇を企画した．学生短期ボランティアもまた役者として現地語で演じるため，劇の練習と現地語の学習に取り組んだ．

(4) 保健・衛生啓発教材作成（紙・模型・映像教材）

イベント実施のため(a)妊産婦検診普及のための紙教材，(b)衛生・手洗いの重要性を伝える紙教材，(c)経口補水液の作成方法を伝える紙教材，(d)胎児の大きさと重さを表現した模型，(e)妊産婦体験キット，(f)妊娠・出産について夫婦で一緒に考えていくことを促すためのインタビュー映像教材，(g)妊産婦検診普及のための映像教材の７つの教材を制作した．教材は，フランス語で作成するため，学生短期ボランティアは，受け入れ隊員や現地の人などサポートを受けて完成させた．また，教材が現地の人にとってリアルなものである必要があったため，学生短期ボランティアは市場などで人々が使っている生活用品などを調査し，教材として利用した．

母子保健・衛生啓発イベントの当日の活動

母子保健・衛生啓発イベントは，女性だけでなく男性や子どもも対象とし，妊産婦健診の大切さと家族計画の重要性を伝えることを目的とした．３月９日のイベント当日は，青年団メンバー（約20名），長期ボランティア（18名）が集まり，運営に携わった．

３月９日の啓発イベントでは，(1)ポスターセッション，(2)母親・父親・子ども対象のワークショップ，(3)啓発劇，(4)啓発映像上映，(5)日本文化紹介の５つの活動を行った（図１を参照）

ポスターセッションでは，学生短期ボランティアは下痢の原因と対処法・経口補水液の大切さと作り方をテーマにとりあげ，下痢の原因を説明したのち実際にその場で経口補水液の作り方を実演した．

ワークショップでは，学生短期ボランティアの１名は母親（女性）対象のワークショップとして，胎児の成長による母体への負担・改善をテーマとし，妊娠時の体の変化やそれを軽減するためのストレッチについて紙教材を用いて伝えた．また，もう１名は子ども向けに衛生教育のワークショップを実施した．子どもたちが楽しく細菌の危険性について学べるように紙芝居

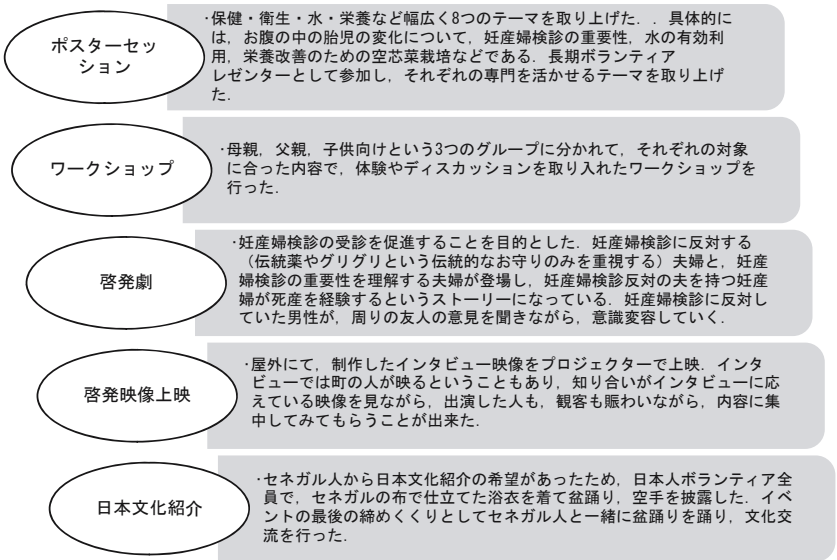

図１　イベントの内容

表２　活動の様子

紙教材を作成する短期ボランティア	青年団との打ち合わせの様子	青年団との打ち合わせの様子
ポスターセッションの打ち合わせ	啓発劇練習中の様子	夕食後のフランス語学習
イベント当日，集まる住民	経口補水液啓発のための紙教材	手洗いワークショップの様子

を使って教え，石鹸で綺麗に洗う方法を実演した.

啓発劇では，学生短期ボランティアは，セネガル人の役者と現地語であるウォルフ語で役を演じた． 当日は150名程の住民が会場に集まった.

日本文化紹介では，学生短期ボランティアセネガルでも人気のある武道である空手を披露したり，日本人全員で盆踊りを踊ったりした.

4．研究の方法

本研究は，アクション・リサーチ（Reason & Bradbury-Huan 2008）に基づいた実践研究である．アクション・リサーチとは研究者と当事者とが共同で取り組む協働的な研究を指す．本研究では，著者らと学生そして受け入れ隊員が共同で，JICA と連携した社会貢献活動の実践のためのデザインモデルの構築に取り組んだ．アクション・リサーチのプロセスでは，実践の中で問題が生じれば積極的な関与を行い，問題解決を目指し、実践をデザインするための要件を明らかにしていく．具体的には，学生短期ボランティアが実践を通して感じた問題やつまずきを洗い出し、それらを解決する中で実践をデザインするための要件を明らかにする.

本研究は役割の違う３名の研究者によって調査を行った．まず，第３著者は，西アフリカでのボランティア経験あり，今回の活動には短期ボランティアとして参加した．２名の学生短期ボランティアをモニタリングしながら，問題があれば積極的に関与して受け入れ隊員と共同でその問題解決に取り組んだ．第２著者は派遣した学生短期ボランティアの指導教員であり，実践をデザインするための具体的な方法を受け入れ隊員にアドバイスした．第１著者は，第２・第３著者と共に参加観察およびインタビューデータを収集し，これらのデータを分析した．実施者と分析者の視点を分けることで，分析の結果の客観性を保証した.

4.1　データ収集と分析の方法

本研究では，下記の２点について明らかにする．ひとつはプログラムに参加した学生の学びである．大学が教育プログラムとして実施する上で本プログラムが有益であるかどうかについて，学生の学びに焦点をあてて評価を行う．ふたつめは，受け入れ隊員にとっての利点である．途上国での活動経験が少なく，専門知識や技術が十分にない学生を受け入れることは受け入れ隊員にとって大きな負担となるが，大学との連携は受け入れ隊員にとって新しい活動への展開となる可能性がある．インタビューおよび参与観察をもとにこの２点を明らかにした上で，双方にとって有益な実践をデザインするための要件を分析し，学習環境のデザインとして提案する.

これら２点を明らかにするために，下記の４つのデータを収集した．なお，表３は，学生短期ボランティアのバックグラウンドを示したものである.

(1) 参与観察

第3著者は，プログラムの事前学習から実施終了までの一連の活動に参加して，モニタリングおよび積極的な関与を行った．第1および第2著者は3月6日から15日の間，セネガルでの活動現場にて参与観察を行った．第1著者は，現地到着後，第3著者から学生の現地での活動状況（特に，何につまずき，どのような支援をし，何が解決されたか）について詳細な情報を収集し，第2・第3著者と積極的に意見交換しながら，現場の状況を理解するためのデータを集めた．収集したデータは，実践中に学生が直面した課題，課題に対する解決方法，その結果という3つの時系列で整理をした．

(2) グループインタビュー

イベント終了後の翌日，受け入れ隊員と学生短期ボランティア2名に対してグループインタビューを行った．インタビューの時間は160分35秒である．半構造化インタビューを行い，①現地で経験したこと，②経験を通して学んだこと，③解決できた課題，できなかった課題，およびその理由についての質問を含みながら自由な対話形式で学生らの実践を通した経験についてデータを収集した．そこで得られたデータで不明な点は，グループインタビュー後に個別にインフォーマルなインタビューを行い，追加のデータを収集した．

収集したデータは，実践を通して学んだことを軸として意味のまとまりごとにコード化した．類似化したコードをまとめてカテゴリーにし，その後，カテゴリーの中から短期ボランティア制度だからこそ経験できたことを分けて考察した．

(3) 最終報告会のプレゼンテーション

活動終了後，学生短期ボランティアはJICAセネガル事務所にて本活動についての成果報告会を行った．15分間のプレゼンテーションの中で，実践の概要（活動の目的と方法），派遣前の活動，活動の具体的な内容，1ヶ月の活動の成果（現地に適したポスター・映像などの視聴覚教材の作成，イベントの運営，セネガル人の保健衛生に対する意識改善，他の保健ポスト・保

表3　参加した学生のバックグラウンド

	学生A	学生B
学年	4年生	3年生
性別	男性	男性
海外経験	フィリピンで社会貢献活動を経験	フィリピンで社会貢献活動を経験
参加の動機	アフリカに行きたい	アフリカに行きたい 青年海外協力隊に関心がある
フランス語	学部時代に副専攻で履修	学部時代に副専攻で履修
現地で必要な映像編集や教材作成のスキル	高齢者向けのパソコン指導のための際教材制作の経験あり	なし

健イベントへの応用の可能性），セネガル人との交流，課題について説明されたため，この内容もデータとした．

（4）JICA 職員との意見交換会での会話

活動終了後（帰国前日に），セネガル JICA 事務所の所長および職員と学生短期ボランティア，受け入れ隊員，筆者ら間での意見交換会の会話もフィールドノートに記録しデータとした．学生は，JICA のプログラムに参加した社会貢献活動と他の社会貢献活動との違いについて意見交換した．また，受け入れ隊員は，本プログラムを実施するにあたり JICA からの必要な支援について意見交換した．

5．分析の結果と考察

5.1　JICA と連携した短期海外研修の特徴とその中での学生の学び

インタビューデータの分析の結果，JICA の大学連携プログラムに特徴的な学びとして次の 5 点について述べた．

（1）自分の専門性に対する内省

学生短期ボランティアは，本実践を通して受け入れ隊員以外にも，様々な専門を持つ青年海外協力隊員と出会い，話を聞く事ができた．会話の中で「専門は何か」「職種は何か」という話題になることが多い．そして，何故その専門なのか，何故国際協力に参加することになったのか，といった青年海外協力隊員の話を聞く中で，専門性を持つことを強く意識するようになった．彼らは，本実践の前にもそれぞれフィリピンで社会貢献活動を実践している．情報学という専門を持って現地で ICT を活用した支援活動をしていた時は，ある程度自信をもって活動していたが，実践を通して自分の専門知識や技術の未熟さを実感していた．たとえば，学生 B は，「いろんな人の話を聞いて，関大の総合情報学部にいれば，ある程度，海外に行ったりとかしてるんだけどちやほやされることがあったんですけど，実際にボランティアの集まるところに行ったら，そんな自分がまだまだ未熟やなということを痛感しました．（学生 B）」と述べている．そして，この経験を通して，自分の専門は何か，これからどういった専門性を身につけていきたいかについて考えるようになった．たとえば，将来，国際協力に関わりたい学生 B は「（今までは大学の授業を）なんとなく履修はしているけれど，それだけでは自信を持てるものっていうのはないです．僕にどんな専門があるんだろうか…（学生 B）」「僕はそんなに視聴覚のプロフェッショナルじゃないので，あまり自信が持てなかった．社会に出て自分がちょっとでも自信が持てるようなことを身に付けたうえで，（青年海外協力隊の）2 年にチャレンジしたいと思います（学生 B）」と述べ，学生時代に何を経験し，その後社会に出てどのような専門性を身につけていくか見通しを立てた将来設計を意識するようになった．学生 A も同様に専門性を持

つことの必要性について意識するようになっていた.「情報学部だからハードもソフトも両方ができると現地の人は思うので，いろいろ頼まれるけれど，それができないというと，それできないのか，と期待されていたことに気付く．全部をまんべんなくできるほうがいいと思った.（学生A)」と，情報学という専門で何を自分が学ぶべきであったかを考えるようになった.

(2) 現地語への関心

学生短期ボランティアらは，現地語かフランス語しか通じない状況におかれ，大きなショックを受けた．彼らがこれまで活動してきたフィリピンでの社会貢献活動では，現地語が話せなくても英語ができれば，コミュニケーションをとることができた．国際協力に携わるためには英語は必須という前提の中で，セネガルに渡航し，英語が全く通じない状況に置かれ,「やっぱり英語だけじゃ駄目なんだなって気づいた．（学生B)」と述べていた.

学生らは，買い物など日常生活においても言葉が通じないため，思うように物事を進めることができないくやしさを感じていたが，日々の生活の中で使える表現を少しずつ習得し，コミュニケーションを楽しむようになっていた．また，現地語を少しでも話すことでセネガル人と友好な関係を築けるという経験から現地語への関心も高まった．活動地のタンバクンダでは，フランス語以外に，ウォルフ語，プラール語，ジョラ語が話される．学生らは，様々な言語での挨拶を覚え，現地の人との会話を楽しんでいた.「現地語で覚えたことが，日常の生活でも通じるんですよ．呪文みたいなものなのに通じた．なんでお前知ってるのって．現地語で笑いをとることができるようになった．（学生A)」．フランス語も現地語もなかなか上達できなかった学生Bも「ウォルフ語もフランス語もどっちも僕にとっては呪文なので大変でした.」とその苦労を述べていたが，少しでも多く単語や表現を覚えて現地の人と交流しようとしていた.

現地に友達が増え，親しくなったりすればするほど，伝えたい，話したい，知りたいという気持ちが生まれ，その度に語学への壁を感じていた．しかし，学生短期ボランティアらは青年海外協力隊員らと一緒に活動し生活する中で，彼らがよく使う表現や単語を聞いたり，セネガル人が反応するやりとりのパターンを何度も聞いたりしているうちに，使える単語や表現を真似することで，それらを自分のものにしていった．たとえば，受け入れ隊員が日々の生活の中で使っていた「ナンガデフ（こんにちは)」という挨拶のやりとりを，学生短期ボランティアらは真似して使うようになっていた.

(3) 現地の人との深い協働関係のつくりかた

学生短期ボランティアらは，本実践とこれまでの社会貢献活動の違いのひとつとして，現地との協働の深さについて述べていた．学生Aは,「共通点は自分のやらなあかんこと，自分ができることを自分で見つけてやるっていう面では一緒だと思います．自分のできることを把握して，自分のできることをやっていて，さらにプラスでやることあったらやるっていう．そういうところをちゃんと考えて動くというのはどっちも一緒です.」と述べる一方で,「違うとこ

ろは，規模の大きさとか，やっぱり，長期（受け入れ隊員）のところに短期がはいるという形なので，先導してくれる人が現地にいるので，深いかかわりの中に入れるというのが違うと思いました．（自分たちがこれまで関わってきた海外での社会貢献活動）プロジェクトだとずっとそこにいるわけじゃないじゃないですか．日本に帰って，日本と海外でやりとりして，たまに行って，そこでやるっていうのだけれど，JICAのほうは長期でずっといる人がいるので，関係性ができているからそこに入っていける．見える世界が全然違う．」と述べ，現地との協働の深さによって，理解できることの違い，関わり方の違いがあることを知った．そして，そういった関係は，長期間かけて築いていくものであることも実感していた．学生Bは，ここでの経験をフィリピンでの社会貢献活動に活かすのであれば，「（これまでは）現地で成果を残さなきゃいけないって必死になっていたので，もう少しそんな緊張をせずにやりたいようにやっていきたい」と述べ，現地の人とともに関係性を築きながら，共に少しずつ進めていくことの大切さに気づいた．

（4）現地の人の目線を意識した教材制作

学生短期ボランティアは3月9日の啓発イベントにむけて，それぞれ自分が担当するワークショップの準備やそこで使う教材制作の際，現地の人たちの目線を意識しながら進めていた．たとえば，「（ポスター制作も）体型とか格好とかも違うし．最初に書いてきて，こっちの考え方を押し付けるんじゃなくて，現地のやりかたに合わせて理解を深めるようにしたいとか．（学生A）」「こっちにきて，女性を観察っていうか，視点を持ってみることができたと思います．こっちきてから（現地の人の目線や理解の度合いにあわせて）やる（準備する）ことにしてよかったと思います（学生B）」と，ワークショップの対象となる現地の人たちが理解しやすいように表現方法を工夫していた．教材制作について事前学習していたこともあり，対象者の立場にたった教材制作を現地でも実践できていたといえる．しかしながら，事前学習をしたからといって，すぐに準備したことを実践できるわけではない．学生短期ボランティアは現地の人たちの目線をどのように理解することができたのだろうか．彼らは，現地の人たちの目線を理解するため，タンバクンダ州医務局で働いているカウンターパートと積極的に意見交換していた．たとえば，学生Bは，下痢になった場合に飲む経口補水液の作り方について説明する際，経口補水液が大切な理由を説明したほうがいいのか，シンプルに作り方を伝えるだけでいいのか，について悩んでいた．これについて「やっぱりカウンターパートも言っていたんですけど，専門的なことを言いすぎても，なかなか理解されない．でも，僕は，簡単にしすぎて，効果が下がってもいけないし，意味が伝わらなかったらいけないかなって．（学生B）」というように，自分の考えに対してカウンターパートから意見をもらい，それを無批判に受け入れるのではなく，意見交換を重ねて，適切な方法を模索していた．また，学生短期ボランティアと一緒に活動をしてきた青年団のメンバーとは毎日顔を合わせる機会があり，彼らの意見も聞くことができた．このように，自分たちの考えをもとに一緒に考えてくれるカウンターパートや青年団の

メンバーの存在は，学生短期ボランティアにとって現地を理解する重要なリソースとなっていた．そして，現地の人の学生短期ボランティアとの関わり方は，それまでに受け入れ隊員との関係性の上に成り立っており，カウンターパートと青年団メンバーは受け入れ隊員が学生短期ボランティアに接するように丁寧に学生短期ボランティアの問いに応えていた．

（5）学びの新しい形態；協働関係の作り方

学生短期ボランティアは，青年海外協力隊員らと活動する中で時々不安や孤立感を持つことがあった．青年海外協力隊員は現地に通じており，また現地語ができるのですぐにセネガル人と仲良くなる．また協働する際，それぞれ専門性を発揮して自分が何をすべきかを判断し行動していく．一方，学生短期ボランティアは「長期隊員（青年海外協力隊員）の人と一緒になったとき，短期感がでてしまって.」と口を揃えて述べ，協働関係を構築する難しさを感じていた．学生Ａは他の社会貢献活動での経験と比較して，「フィリピンでの活動は何年も活動しているし，指導教員もコネクションもあるので，土台がしっかりしているから行って活動できますけど，セネガルでは，こっちの人と関係性を作るのも簡単じゃない.」と，新しい土地で最初から協働関係をつくることの難しさを感じていた．しかし彼らは現地の人たちとの協働関係を，受け入れ隊員や経験のある他の隊員らの支援によって構築するようになった．たとえば，「自分たちだけではなかなか中に入っていきにくかったけれど，（受け入れ隊員や他の隊員らに中に入ってもらって，現地の人や他の隊員と）一緒にインタビューしたり，そういう機会を作ってもらってすごしやすかったです．（学生Ａ）」と述べており，受け入れ隊員や他の青年海外協力隊員がセネガル人との協働の仲介役になっていた．

学生短期ボランティアは，現地との良好な協働関係を構築するためには日々のインフォーマルな場面での関係性構築が重要であることに気づき，それを積極的に実践していた．ひとりひとりとの長い挨拶，無駄話，冗談，そういったことを楽しむようになっていた．学生Ｂは，こういった関係性を構築するためには，趣味や関心を幅広く持つことが大切だということに気づいた．共通の趣味や関心があれば，お互い知らない間でも親密感が生まれる．学生Ａは，サッカーなどで共通点があり現地の人とすぐに仲良くなれたが，学生Ｂは共通点をなかなか見いだせず悩んでいた．「サッカーの話題をちょっとでも知っていたら，選手の名前とかだけでもすごい盛り上がるじゃないですか．学生Ａさんはサッカー見るのも好きで，セネガル人の選手の名前も知っていたので，その名前を言うとみんなでテンションあがっていくけど，僕はそれを知らない．空手とかもちょっとやって見せるだけでも，こっちの人は喜んでくれるじゃないですか．でも，僕空手も知らない．Ａさんがどんどんコミュニケーションをとっているのをみつつ，やばいやばいって思った．（学生Ｂ）」というように，現地で人間関係を構築するためにはインフォーマルな場で関係性が構築できることも重要で，そのためには共通の趣味や関心を持てるように日々関心を広げていくことの大切さを実感していた．

5.2 受け入れ隊員が学生など複数の関係者が関わるイベントの実践を通して経験したこと

受け入れ隊員は，学生短期ボランティア受け入れのため，新たに地域連携のイベントを計画，実施することになった．イベントを実施するためには，現地の青年団との密接な連携，イベントのための場所や時間の確保，広報，教材や広報物の制作，啓発劇の練習など様々な準備が必要になる．これらを現地のカウンターパート，他の青年海外協力隊員，そして学生短期ボランティアと協働してどのようにイベントを作り上げることができたのか．経験を通して見えてきた可能性および課題として次の7点があげられた．

(1) 学生に対する知識・技術面での期待との齟齬

受け入れ隊員は，学生短期ボランティア受け入れの条件として，調書に「どのような技術が必要か」を明記していたため学生短期ボランティアがこれを理解し活動に必要な技術を取得した状態で現場に来ることを期待していた．しかし実際には十分な技術を持たないまま現地に派遣されてきた．これは，単なる学生短期ボランティアの準備不足ではなく，調書に示されている技術の程度を学生短期ボランティアが明確にイメージできなかったところに理由があった．学生短期ボランティアは，「リアリティの問題を感じたこともあります．今思うと（日本で練習してみて）分からないところは解決してから来たほうが良かった．そのほうがこっちにきてから，編集ももっとスムーズにできたと思います．」と，映像編集についてもどこまで求められているかが分からず，十分な準備がないままに渡航した．

また，言語や活動内容についても同様の問題が見られた．言語についても，学生らは事前に大学でフランス語を科目履修し準備はしてきたものの，リアリティを感じないという理由から本気で取り組めなかった．また活動内容についても，妊産婦とその夫への啓発活動をすることを伝える活動であることを調書や事前のテレビ会議を通して伝えていたが，これらも内容についての事前準備が十分ではなかった．この現状に対して受け入れ隊員は，「妊産婦検診の大切さとか，妊婦の体の変化について理解してもらうという目的が決まっていたので，そこに合わせたある程度の言葉の学習は事前にしてきてほしかった．また，技術のほうも，やる目的が決まっていたので，そこに合わせてプレミア（編集ソフト）もそうだし基本的なことはできるようになってきてほしかった」と述べる一方，「会ったことがない学生だし，彼らに何ができるかわからなかった．自分の学部生のころと違うし，こっちにきて私の感覚と二人の感覚が違うというのがわかった．」という反省点から，「自分の中で当たり前だと思っていたので言わなかったんですけど，何を事前に勉強しておくべきか，また，こっちにきてからそれらを勉強する時間がないということも含めてこちらも明示しておくべきだった．」と，学生短期ボランティアと協働する際の考慮点としてリアリティの付与と明確なインストラクションの必要性をあげた．

(2) 学生のケアに対する負担を軽減させる役割分担の工夫

受け入れ隊員にとって大きな負担のひとつは学生短期ボランティアの「通訳」であった．業

務だけではなく，日々の生活，たとえば，食事の際のメニューの注文，買い物などすべての場面で最初のころは通訳をしなければならなかった．学生短期ボランティアの危機管理も受け入れ隊員が任されているため，現地語がわからない学生短期ボランティアを，業務以外の時間だからといって放置するわけにはいかない．この負担はとても大きい．本実践では，第３著者が事前学習から現地での活動まで行動を共にしたため，その負担を分担することができたが，受け入れ隊員だけでそれを担うのは大変難しい．そのため，学生短期ボランティアを受け入れる際には「言葉の面は，まず，基本的な日常会話．これができないと生活ができない．活動期間は１か月と時間もないし，せめて日常生活は話せるようにしておいてほしい.」と事前学習の段階で語学については特に準備すべきであると考える．

一方で受け入れ隊員は，短期ボランティアという制度には事前に語学研修を受ける制度はないため，現地での活動の工夫が必要であると感じていた．そこで，言語に頼らずにできる個別の活動と，言語を学ぶきっかけとなるセネガル人と連携した活動の両方を学生たちの業務として与えた．言語に頼らずできる個別の活動としては映像編集，セネガル人と連携した活動は劇やワークショップの実施である．このように，学生短期ボランティアの立場を考えて，彼らに充実感，達成感，現地の関わりを持てるような役割を与えながら業務を分担しイベントの準備・運営を行った.

（3）学生の異文化の中の精神的負担への対応

学生短期ボランティアは，JICA の短期ボランティアとして正式にプログラムに参加しているというプレッシャーもあり，成果を出さなければいけないとか，受け入れ隊員に迷惑をかけてはいけないとか緊張状態の中で活動をしていた．しかしながら，活動の最中には「なんかあれも，やらなきゃいけない，と思いつつも，あまりやれていなかった．それがちょっと，そういう（さぼってしまう）習慣がついてしまっているし，それは直さなきゃいけないとは思うんですけど．（学生 B）」，「なんかひきこもり気味になったこともありました．外にでるのがしんどいとおもうことがあった．（学生 A））というように精神的に辛い時期も経験していた.

受け入れ隊員は，学生短期ボランティアの状況に注意を払い，励ますように声をかけていたが，こういった励ましの言葉が逆に学生の負担になることもあった．たとえば，学生 B は，「なんかみんなに日に日に元気ないんじゃないって言われたりすると，そう思われないようにどうにかしないとって思うんですけど，そうすればするほど，どんどんなんか元気をあるようにみせなきゃって，変に意識してしまってどうしたらいいかわからなくなって，どんどん，どーんてテンションさがってきて．隊員の人もそれに気づきだしたのか，”なんか元気ないよね”っていってきてくれて．そうじゃないところを見せないといけないなって思って，それもプレッシャーでしたね．大丈夫って言われれば言われるほど，大丈夫じゃなくなっていく．大丈夫じゃないですっていえないじゃないですか．（学生 B）」と集団でいるからこそ，頑張らなければ行けないプレッシャーに疲れてしまうということもあった．学生短期ボランティアは青年海外協

力隊員と異なり短時間の間に新しい環境に慣れ，人間関係をつくり，活動していくため精神的な負担も多い．受け入れ隊員は，学生短期ボランティアの状況を日々の生活の中で確認はしているものの，見ているだけでは分からないこともあるため，学生短期ボランティアが何を考え，何を感じているかを知る機会，たとえば，内省の場を共有する必要性を感じた．

（4）教育的観点をもった支援方法

受け入れ隊員は，学生短期ボランティアが教材制作をはじめワークショップを準備している様子をみて，学生短期ボランティアにセネガル人の日常の生活を経験させたかったと振り返った．たとえば，「Bくんがワークショップのときに何ミリリットルの水に塩をひとつまみ，砂糖をいくらという話をしたときに，ここで何ミリリットルって誰も測ってないし，みんながよく水を飲むものってコップみたいなものなんですが，それはどんなに貧しい家にでもあるって自分は知っているからわかるけど，人の家にいった経験がほとんどなく，いってもお金持ちの家ばっかりだからみてないだろうし，そういうのを見れる環境をつくれればよかったと思った．」と，学生短期ボランティアの現地での活動をより円滑に進めるためには，セネガルでの日常の生活を経験してもらうことが必要であったと振り返る．1ヶ月という短い期間に，現地での活動以外に，地元セネガル人の日常の生活を経験させる時間をもつことは簡単なことではないが，「私だって最初はわからなかったことなので，見せたところで分からないことが分かるというわけではないけれど，イメージをもってもらうことができるし，私が説明するときも，あの家のあそこで使っていたコップといって，二人とも共通のイメージを持つことができたと思う．」というように，協働の土台となる共通の経験の必要性を述べた．

（5）日々の生活・活動を異化することによる内省

受け入れ隊員は，学生短期ボランティアと関わる中で，当たり前となっていた日々の生活や業務を異化し，内省することができた．たとえば，「短期ボランティアの視点からもう一度活動や生活を見直すことができた．挨拶にしても，最初はあの長い挨拶を楽しんでいたけれど，今では，急いでいるからと流してしまっていた自分がいたのでは？と気づく．短期ボランティアの人が喜んだり，驚いたりしているのをみて，生活や活動を見直すことができた」というように学生たちを通して，着任当初の自分を思い出し，当たり前の日常の中で見落としていた日々の面白さを再認識するようになった．

（6）地域との新しい連携

妊産婦の問題の関係者である母親・父親・子どもを対象に同時にワークショップをするという大規模なイベントはひとりの隊員だけでは実施が難しい．ワークショップには，母子保健の重要性を知ってもらうための教材が必要となるが，教材を制作するためには現地調査を含め人手が不可欠である．学生短期ボランティアが参加することをきっかけとして，所属していたタ

ンバクンダ州医務局だけではなく地域の青年団らとも連携して実践することになった．このイベントを計画・実施するにあたり地域の関係者と連携が必要となり，「ひとりではこんなに地域の人や保健ポストの人と関わる事がなかったが，全体で取り組んだため，深く関わる事ができた．そういうのが無い限り一緒にひとつのことに全体で取り組むことはない．一緒にやったからこそ，しっかりみんなで関わる事ができた.」というように，これが彼女の地域との連携をさらに強めることになった.

同時に，新しく連携する団体との協働は想像以上に困難で，「私は個人的には，疲れました.」と協働した青年団と継続して連携する予定はないが，「ほかにも団体はあるし，関わりたいとおもっている保健ポストもあると聞いたので，その人たちと会ってみてもいいかなって思います.」と，地域の青年団など新たな連携を拡大することについて可能性を見いだすことができるようになった.

（7）他の隊員との連携事業への展開

受け入れ隊員は，このようなイベントを通して，他の青年海外協力隊員との連携の可能性を実感することができた.「こうやって短期の人も長期の他の隊員の人も参加して，誰かと一緒にやるというイメージとかそういう体験があると，次にその人たちもつながるし，そのイメージを持つことができた.」と，協働してひとつのイベントをつくりあげるという経験が，受け入れ隊員だけではなく他の青年海外協力隊員にとっても次の活動をイメージ（予測）につながっていた．また，協働の経験だけではなく，制作した教材も活動を拡大するきっかけとなる可能性がある．たとえば，「村とかになると保健ポストは，その周辺の一番大きな病院になるので，ここのポスト以上に人はきているし，需要もやっぱりいっぱいあるし，物資もすくないなど問題もかかえていると思うので，そういうポストで働いている隊員さんと今回作った教材とかを使ってこういう啓発ができたりとか．作ったもの以外でも作った経験を活かしてこういうことができそうだなあって，次につながりそうな期待があります.」と，制作した教材や制作を通して得た技術を土台に，新しい活動へと展開する可能性を述べていた.

6．実践の課題と今後の研究への展望

本研究では，JICA の大学連携プログラムに参加した学生短期ボランティアおよび受け入れ隊員が，何を経験しそこから何を学んだかについて明らかにした．5.1および5.2では，それぞれ学生および受け入れ隊員が実践を通して経験したことを，インタビューデータを引用しながら詳述した．本節では，これらの経験をもとに解決できなかった課題を示し，次への研究への展望としたい.

6.1 活動のイメージの共有

学生短期ボランティアに現地での活動のイメージを持ってもらうため，3ヶ月の事前学習を設けた．事前学習によって，学生らは渡航前にある程度活動の準備をすることができたため，「こういうワークショップをするということは決まっていたので，日本で準備できることは何かということを，考えていって，いってもらったことで，準備しないといけないなって気持ちになりましたし，準備してこっちにきたので，まったくなしできたら，やっぱりめちゃめちゃ厳しかったなあって思います．（学生B）」というように，準備したことを土台に現地の実践に円滑に参与できた．

一方，事前学習では受け入れ隊員とインターネットを通して事前に打ち合わせを何度か重ね，母子保健についても資料をもとに勉強会をしたり，実践で必要な技術を練習したりして現地で実践できるように準備したが，学生短期ボランティアは現地にいって「勉強不足であった」と振り返った．「医務局のほうとか専門のことも，（現地の人と）こんなにやりとりするとは思っていなかったので，このやりとりがイメージできてれば，もっとフランス語をやっていたのかな，って思いました．（学生A）」と述べ，受け入れ隊員と学生短期ボランティアの間に期待の齟齬があったことがわかる．しかしながら，どれだけ現地での活動について説明されたところで，経験のない学生短期ボランティアがそれをイメージするのは難しく，また，受け入れ隊員にとってもこれまで協働したことがない学生短期ボランティアに何ができるのか，どう協働できるのかを予測することはほぼ不可能である．実際，受け入れ隊員は「事前の準備もあったのでそれぞれ担当はきまっていたんですけど，その分量が，適格か，多すぎか，少なすぎか，どれくらい任せていいのか，不安だった」と述べ，どのように学生短期ボランティアと協働できるかについて実践前から不安を持っていた．そのため，事前学習では，その齟齬を前提として事前学習が現地での実践の参加のきっかけ（土台）となるようなデザインをする必要がある．

6.2 異文化間での協働の仕方，役割

学生短期ボランティアが現地での活動のイメージがもてない理由のひとつは，学生短期ボランティアが現地の人との協働の仕方が分からないことであった．つまり，何をすべきかが分かっていても，それをどう進めていけばいいかが分からなかった．受け入れ隊員は，学生短期ボランティア受け入れの業務調整に加え，日々の活動，イベントの準備で忙しくしていたため，学生短期ボランティアは受け入れ隊員に対して「（受け入れ隊員に）申し訳なくて，どんどん聞けなくなっていた．本当に．つきっきりで申し訳なくて，僕ら2人でやってしまっていた．どうしたらいいか，ということを解決できなかった．（学生A）」と，分からないことをその場で解決できない状況に置かれていた．そのため，ポスター制作や映像編集に必要以上の時間をかけたり，分からない事があったときそれをどう解決すればよいか分からずそこで立ち往生したりしていた（参与観察より）．本実践では第3著者が介入し，現地の誰に相談して進めればいいか，現地の誰に協力を得ればいいか，現地の時間感覚ではどのように活動のスケジュールを立

てればいいかなどアドバイスしたりした．その結果，「何をやらないといけないかが分かっているとやりやすかった．それをやるっていうやる気は出たと思います．どれをしっかりやればいいかがわからなかったところがあって．（学生A）」「教材作成とかのスケジュールも（第3筆者や受け入れ隊員さんがいなかったら）いついつまでにやってっていうのを自分たちで決めて作業を進めれなかったと思います．（学生B）」と現地との協働の仕方が理解できたころには，実践に積極的に参加することができるようになった．

以上のことは，異文化間での協働において役割を適切に配置する人の重要性を示している．

6.3 言語面

英語を母国語としない地域でのプログラムについては，言語の事前学習について十分に検討する必要がある．受け入れ隊員の最大の負担のひとつが，日常および業務内での通訳である．すべての場面において，通訳をしなければ協働を進めることができない．本実践では，言語に頼らずにできる個別の活動と，言語を学ぶきっかけとなるセネガル人と連携した活動の両方を学生短期ボランティアの業務として役割を与えることで，この問題に対応したが，言語の問題がすべて解決されたわけではない．学生短期ボランティアにとっても言語が通じないというストレスは大きい．「なんかアイデアがあっても自分から提案できないし，聞いてても，ほんまに単語をひろって妄想してイメージするしかなくて何もできなくて悔しかった．やりたくてもできない．言いたいことがあってもいえない．全然言葉ができなくて．しっかり調べるんですけど，最低限のことは，日常で使う言葉は一応覚えたんですけど，難しい話は全然ついていけない．（学生B）」「なんかくやしいっす．何もできない．日本では何もできなくてもしゃべることができる．英語でも小学校，中学校である程度英語をやってきたので，ある程度理解できる．でもここでは全くわからなかったので．それでも，まわりはみんな活動をしていて，僕らはその中に入ろうとしたんですけど，難しい（学生A）」と言語の不自由さを強く感じていた．一方，学生短期ボランティアの異文化での学びの観点から見れば，言語が通じないというくやしさの経験は，学生たちに英語以外の言語の重要性，学び楽しさを発見させるきっかけになっていた（5.1.（2）現地語への関心ー英語以外の言語への関心ーを参照）．しかしながら，受け入れ隊員の負担軽減は，検討すべき課題である．JICAおよび大学という制度を活用して事前の言語習得または現地での言語に関する問題に対してどのように支援するかをデザインすることが必要である．

6.4 活動の形態

本実践では，たった1ヶ月という短期間でイベントの準備を完了して，実施しなければならなかったため，事前準備が不可欠であった．そのため，本実践では，3か月間から学生短期ボランティアとインターネットを通して実践の準備をしたりしてきた．しかし，現行の短期ボランティア制度では，事前学習にこれほど時間をかけることはできない．そのため，受け入れ隊

員との交流も事前学習も十分にできないまま渡航することになる．このような場合，本実践のようにイベント型の連携（活動拡張型）を行うことは難しいだろう．

では，現行の制度の中でどのような連携ができるのだろうか．ひとつは，受け入れ隊員の日々の業務の一部を手伝うというものである．今回のように新しく活動を生み出すのではなく，日々の業務の一部を周辺的な立場から参加し手伝い，隊員の活動を通して国際協力を経験する形態（業務支援型）がある．たとえば，村落でのフィールド調査などでインタビュー調査や映像撮影を手伝ったり，体育なので測定を手伝ったりすることである．少しずつ業務内容を高度なものにしながら学生短期ボランティアにできる範囲で参加させることができる．また，受け入れ隊員の活動に参加する形態（活動観察型）がある．現地の人たちと同様に隊員が提供するサービスを受けたり，隊員の活動を観察したりする参加形態もある．現地の人の立場から国際協力でどのような活動が行われているかを見たり，聞いたりすることで経験することができる．

いずれの形態であっても，学生短期ボランティアにどのように実践に参与させるかの実践のデザインを受け入れ隊員だけに頼っていいかという課題は残る．本実践では，受け入れ隊員と著者らが連携して実践をデザインしモニタリング・支援を行ってきた．受け入れ隊員にとっては，「別にやらせなくても自分がやったほうが早い．翻訳とか，自分でやったほうが早いと思う．」というように自分に負担がないような形態で学生を参加させることもできる．しかし，「でも，せっかく来てもらっているんだし，何か得てもらいたいという意識をもっていたからこそ，もどかしかった．そうじゃなかったら，場を盛り上げる役だけでもいいという考え方もできた．けどやっぱり，せっかく大学のうちに，こんなところまできてくれて，なんとなく楽しかっただけで帰っるんだったら，意味ないし，何か得てもらいたいっていうのがあった．」と地域にとっても有益な活動としたいという気持ちがあるからこそ，受け入れを快諾している．そのためにも，すべてを受け入れ隊員に任せるのではなく，たとえば，本実践のように大学教員と連携して実践をデザインしたり，第３著者のように学生短期ボランティアと受け入れ隊員の間をつなぐような役割の人が参与したりする工夫が必要だろう．

付記：本研究は、関西大学の平成24・25年度教育研究高度化促進費から助成を受けている。

参考文献

岸磨貴子，今野貴之，久保田賢一（2010）「インターネットを活用した異文化間の協働を促す学習環境デザインー実践共同体の組織化の視座から ──」『多文化関係学会』，Vol.17，pp.105-121

工藤和宏（2009）日本の大学生に対する短期外国語研修の教育的効果 ──グラウンデッド・セオリー・アプローチに基づく一考察 ──．スピーチ・コミュニケーション教育 22（2）：117-139

Liu, Ruo-lan; Lee, Hsin-hua (2011) "Exploring the Cross-Cultural Experiences of College Students with Diverse Backgrounds Performing International Service-Learning in Myanmar", New Horizons in Education, v59 n2 p38-50

JICA「青年 / 短期ボランティア募集要項」http://www.jica.go.jp/volunteer/application/short-seinen/require/

文部科学省（2011）産学官によるグローバル人材の育成 のための戦略．産学連携によるグローバル人材育成

推進会議.
http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/detail/__icsFiles/afieldfile/2011/06/01/1301460_1.pdf（2014年7月27 日参照）
山本良太，今野貴之，岸磨貴子，久保田賢一（2012）海外フィールドワークにおける学習を促す要件の検討ー協働する他者との関わりに注目して ── 日本教育工学会論文集，36巻 ── Suppl. 号，pp.213-216
お茶の水女子大学（2015）グローバル協力センター　http://www-w.ao.ocha.ac.jp/intl/cwed/（2015年1月28日参照）
明治大学（2015）国際協力人材育成プログラム　http://www.hric.jp（2015年1月28日参照）
早稲田大学（2015）早稲田大学平山郁夫記念ボランティアセンター　http://www.waseda.jp/wavoc（2015年1月28日参照）
Reason, P., W. & Hilary Bradbury-Huan（2008）The SAGE Handbook of Action Research, Participative inquiry and practice, London: SAGE Publications Ltd（Second Edition）